

1 次の文章を読んで、あとの(1)～(5)の問いに答えなさい。(5点×5問)

わたしは里山の自然環境が急速な  化に向かっており、生物の  性が決して長続きしないであろう現実と向き合ってきた。動植物の現状はレッドデータブックという形で、すでに国や都道府県がまとめたものがたくさん出されているし、希少野生生物を守るための法律や条例もある。ただ、絶滅寸前になったものを対症療法的に残そうとしても、里山の環境の変化が続いてゆく限り、絶滅の大きな波は止まることはない。

里山の環境の変化を止めるすべはないのだろうか。資源利用の究極の見本は、地域で自給自足の資源利用が行われていた時代の里山の利用方法にある。、生活水準を当時の状態に戻すことは、現実的には困難だ。現在では「環境問題」という言葉が生まれ、現在の生活水準を維持したまま、新たな技術開発によって問題を解消することを目指している。その代表が、再生可能エネルギーと呼ばれる太陽光発電や風力発電であり、これらの普及に期待を寄せている人は多いだろう。

ただ、少し落ち着いて考えてみたい。 太陽光発電や風力発電の場合、土地の取得は開発する事業者に任されている。行政はそこに関与しない仕組みのため、一〇年後にどれだけの面積の発電施設が設置されて、そのためにどれだけの森林が失われるのかを、現状では誰一人として把握していないのだ。ごく最近になって、研究者らが太陽光発電施設のデータベース情報に、航空写真から読み取った土地利用の情報を重ねたうえで、太陽光発電施設用としては森林が最も開発されていることを指摘し、さらにさまざまな条件下での生態系の消失面積を予測した論文を発表したが、これとて本来は、国のエネルギー問題を扱う機関が情報を集約しておけば、統計上の数字だけで将来が分析できることのはずだ。

必要なのは、現状の分析の先にある、土地利用の計画についての議論のはずだ。、太陽光発電や風力発電では、発電過程では温室効果ガスである二酸化炭素を排出しないことが利点とされているが、実際には工業製品として設備が製造される段階で一定量の二酸化炭素が排出される。、大規模に森林が減ることで、二酸化炭素は吸収されなくなる。それなのに、そうした収支の計算はなされないまま、<sup>⑦</sup>「持続可能」という言葉が独り歩きしている。つまり、表向きには持続可能を標榜<sup>ひょうぼう</sup>しながらも、実際にはこれまで以上に里山を切り拓いて資源を失い、持続可能とは反対の方向に進んでいるものが少なくないことを指摘したいのだ。

西欧諸国には、残すべき自然環境の広さを議論したうえで、開発可能な地域と

手をつけない地域をあらかじめ線引きする「ゾーニング」という仕組みがある。ところが日本にはそれがない。その結果、太陽光、あるいは風力発電施設の建設によって里山の開発が無秩序に進み、昆虫類の生息地の大規模な分断が懸念されるような計画や、標高の低い山に残った広大なブナ林が分断される計画が発表される事態が相次いでいる。新たな開発を進めてゆくならば、国土全体のゾーニングが、まず急務だろう。

わたしは現在の利便性を否定していないし、生活の豊かさを享受している一人だ。だから、あらゆる開発に反対する立場ではない。ただ、長期計画のないままに開発が自由に行われる、という将来に対する無責任さは、いち早く修正しなければならないと思っている。この、里山の土地利用に関する無責任さは、かつて集落のなかで土地利用が完結していた時代には考えられなかったことだ。

あと二〇年経てば、里山で自給自足の生活を送ってきた人びとは世を去り、資源を無駄なく利用してきた知恵は失われる。持続可能な生活を送ってきた民俗知が失われることは、近世のなかでは最大の文化の消失、文化の断絶だといつても過言ではないだろう。

長期的な展望のないまま、持続可能という言葉を多用して希望を抱かせ、都合のいい場面では自然との共存を美化する。里山をそのような存在にしてしまうのは、あまりにも都合よくないだろうか。<sup>④</sup>この「里山危機」は社会の仕組みのうえに、無責任さが重なってつくり出されているものだ。

まず、現実を直視することと、長期的に開発される面積を計画的に決めること、そして開発可能な地域のゾーニングを進めることが必要だ。地に足の着いた資源利用を議論してゆくことが、すぐにでも必要なことに、多くの人が薄々気づいているのではないだろうか。

(永幡嘉之 『フォト・レポート 里山危機 東北からの報告』より)

(設問の都合上、一部改変)

※里山……集落の近くにあつて、人々との影響を受けた生態系が存在する森林や山。

※レッドデータブック……絶滅のおそれのある野生生物をリスト化し、その分布や生息状況を説明した資料集。

※標榜……主義・主張などをはつきりと掲げ、示すこと。

(1)  と  に入る語の組み合わせとして最も適当なものを、次から一つ選び、その番号をマークしなさい。

- ① A ただし B ところで C しかも D だが
- ② A ただし B たとえば C さらに D また
- ③ A むしろ B ところで C つまり D では
- ④ A むしろ B たとえば C さらに D さて
- ⑤ A だから B たとえば C しかも D また

(2) 、 に入る語として最も適当なものを、次から一つ選び、その番号をマークしなさい。

- ① X 画一 Y 多様
- ② X 一体 Y 多様
- ③ X 一般 Y 普遍
- ④ X 活性 Y 画一
- ⑤ X 画一 Y 一般

(3) 傍線部㉗『持続可能』という言葉が独り歩きしている」を説明したものとして最も適当なものを、次から一つ選び、その番号をマークしなさい。

- ① 里山の現状分析が不十分なために、新たな技術開発も進まず、持続可能という言葉を使うだけで現状に満足してしまっているということ。
- ② これまで以上に里山を切り拓いて資源を失い、持続可能とは反対の方向に進んでいることが実際にはまれであるということ。
- ③ 森林が減ることで二酸化炭素が吸収されないことなどが理解されず、持続可能とは反対の方向に進んでいることが多いということ。
- ④ 風力発電や太陽光発電のよさが理解されず、行政も関与しないため実は設置が進まず、普及していかないということ。
- ⑤ 持続可能という言葉だけがもてはやされ、収支の計算を怠っているため、発電の際に二酸化炭素が多く排出されているということ。

(4) 傍線部①「この『里山危機』は社会の仕組みのうえに、無責任さが重なって  
つくり出されているものだ」を説明したものととして最も適当なものを、次から  
一つ選び、その番号をマークしなさい。

4

- ① 再生可能エネルギーの土地の取得に行政は関与しないという我が国の  
仕組みのうえに、長期計画のないままに里山が土地利用されることによ  
ってあらゆる動植物が生息できなくなっているということ。
- ② 我が国で行っている「ゾーニング」という仕組みが十分に機能してい  
ないうえに、里山を無秩序に開発していることによって、動植物が絶  
滅に瀕することになったということ。
- ③ 長期に開発される面積を、計画的に決める社会の仕組みがないうえに、  
持続可能という言葉を使うことによって自然との共存を美化するあま  
り、環境を考慮した土地開発が進んでいないということ。
- ④ 「ゾーニング」という仕組みが日本にはないが、長期的に開発される  
面積を計画的に決めることによって、かえって動植物が住みにくい環  
境を作っているということ。
- ⑤ 日本には、開発可能な地域と手をつけない地域を線引きするという仕  
組みがあるが、都合のよい場面で自然との共存を美化することで、里  
山を危機的な状況にしてしまったということ。

(5) 本文の内容として最も適当なものを次から一つ選び、その番号をマークしな  
さい。

5

- ① 持続可能な生活を維持していくには、生活の利便性や豊かさを求める  
のではなく、人々が自然との共存を美化することが必要である。
- ② 絶滅寸前になった希少生物を守るために、法律や条令を遵守すること  
が、ひいては里山を守ることにつながっていくのである。
- ③ 里山の危機は自然環境の危機であるので、里山の資源利用を見本とし  
て自然エネルギーを活用し、持続可能な社会を実現するべきである。
- ④ 現在の生活水準を維持したまま環境問題を解決するために、再生可能  
エネルギーである太陽光発電や風力発電が最も有効な手段である。
- ⑤ 里山の希少野生生物は絶滅の危機に瀕しているが、それを守るには国  
土全体のゾーニングと長期的な開発計画を進めることが必要である。

2 次の文章を読んで、あとの(1)～(4)の問いに答えなさい。(5点×4問)

建築事務所で働く智久は、愛子先生の料理教室に通っている。料理教室は京都の路地にある長屋だ。料理教室の仲間には佐伯やミキもいるが、その中の一人、ヴァインセントは古い建物をリノベーションしてカフェを開こうとしており、その設計を智久に頼みたいと言う。智久は建築事務所の大沢所長に、カフェの設計をさせてほしいと頼んだが、大沢は許可しなかった。智久はそのことをヴァインセントに言い出せないでいる。以下はそれに続く文章であり、料理教室での場面である。

「それで、その後、調子はどうなんや？」

ぼそりと言った佐伯に、智久は一瞬、返事につまった。

すると、横からミキも身を乗りだしてくる。

「そうそう、図書館の美女さんとは、どうなったんですか？」

仕事の件ではなく、そちらの話か。

「いちおう、顔見知りというか、ちよつとした会話くらいはできるようになりました」

「よかったですね。うんうん、少しずつでも、距離を縮めていけるといいですね」  
頬をほんのりと桃色に染めて、ミキは楽しそうに言う。

「そうか。暗い顔してるから、てつきり、振られたんかと思つたわ」

関心のなさそうな顔ながらも、佐伯はつぶやく。

その言葉に、ミキは弾けるような笑い声をあげた。

「えええつ、佐伯さん、何気にひどい」

「でも、ま、一回や二回、断られたくらいではあきらめへんことやな」

普段、あまり会話に入ってくることのない佐伯だが、彼なりに気にかけてくれていたのだろう。その心遣いを知り、智久は酒の味がますます良くなる気がした。  
あきらめないこと。

その言葉は恋愛についてのアドバイスなのだろうが、智久にとってはもつひとつの懸案事項についても、突き刺さった。

大沢に断られたといつても、まだ、一回だけだ。

それで、あきらめていいのだろうか？

悶々としながら猪口を傾ける合間に、料理をつまんでいると、卓袱台に愛子先生の手が伸びた。

「よかつたら、これもどうぞ」

愛子先生が差しだした長方形の皿には、串に刺された生麩が四本、並んでいた。

「残ってた分の生麩を田楽にしました。簡単なんですよ。軽くあぶって、柚子味噌をのせるだけですから」

これまた酒に合いそうな料理の登場に、歓声があがる。

おなじ素材でも、調理法がちがうと、目先が変わって、新鮮に感じる。

(中略)

「……本当に、素晴らしいカフェになると思うのだ、なあ、トモ？」

気がつくど、ヴァインセントに背中を叩かれ、智久は大きくなすいていた。

「ええ、絶対に。オープンしたら、みなさんに来ていただきたいんです」

⑦ なにを言っているんだ、自分は。

口から出た言葉に、頭のなかの冷静な部分が、驚いている。

カフェの件は、所長に却下されたから、もう……。

だが、言葉は止まらない。

「建築っていうのは、物件が完成して、クライアントに渡して、それで終わりっていうんじゃない、その先を考えなくちゃいけないと思うんです。それって当たり前のことなのに、最近事務所の仕事が忙しくて、所長にOKもらうことが目的になっていたというか、根本的なところを忘れていた気がして……。今回、古い物件を手がけることで、受け継ぐとか、残すってことを意識するようになって……。自分の仕事っていうのは、手が離れたあとも、知らないひとにいろんな影響を与えるわけなんですよ」

猪口を片手に、宣言するように述べて、ぐるりと卓袱台を見まわす。

「カフェって、ヴァインセントさんからの依頼ではあるけれど、ある意味で、オープンしたあとに来るお客さんすべてが心地よく過ごせるために作るものでもあるんです。実際のクライアントだけじゃなくて、利用者のための設計っていうか」

酒の勢いもあって、智久はいつもより饒舌じょうせつになっていた。

⑧ 仕事の関係者には言えないような思いも、ここでなら口にする事ができた。

「だから、自分にとっての一番の喜びっていうのは、立派な建物を作って賞をもらうとか、業界で高く評価されるとかじゃなくて、カフェなら、そこが居心地のいい場所になって、気に入ってくれるお客さんがいて、ずっと、使いつづけてもらえることで……。そんな仕事がしたいんです」

長々と語ったあと、なに熱くなってるんだ……と気恥ずかしくなり、智久は酒をあおる。

⑨ 自分がそんなことを考えていたとは、自覚していなかった。この場がなければ、改めて深く考えもせず、事務所と自宅を往復して、仕事をつづけていただろう。

「お教室とおなじですね」

やわらかく微笑ほほえんで、愛子先生が言った。

「お料理を教えるんも、そのときで終わりというんやなくて、生徒さんが気に入ってくればって、おうちで何度も作って、自分のものにしてもらうって、ようやく、

お役目を果たせた気になります」

愛子先生の言葉を受けて、智久は心強く感じた。

自分の仕事が、だれかの役に立ち、人生を豊かにする。

愛子先生だけでなく、ヴァインセントも、ミキも、佐伯も、この場にいるひとたちはその気持ちを理解してくれる気がした。

智久は先ほど愛子先生が出してくれた生麩の田楽をじっと見つめる。

あぶって味噌をつければ酒の肴さかなにぴったりの生麩だが、あんこと合わせることで和菓子にもなったりする。

④ やりようはいくらでもあるはずだ。

素材は変わらなくとも、味つけを相手の好みに合わせることで、ちがった展開を引き寄せることができるのではないだろうか。

そう、だから……。

あきらめるのは、まだ早い。

もう一度、所長にぶつかってみよう。

そう心に決めて、智久は生麩田楽にかじりついた。

(藤野恵美『初恋料理教室』より)

(設問の都合上、一部改変)

※田楽……素材を串に刺して、味噌を塗って焼いた料理。

※クライアント……仕事を依頼した人。

※饒舌……よくしゃべること。

(1) 傍線部⑦「なにを言っているんだ、自分は」とあるが、智久はなぜこのように思ったのか。智久がこのように思った理由として最も適当なものを、次から一つ選び、その番号をマークしなさい。

- ① カフェの設計が所長に却下されたことをヴァインセントに言い出せないのに、オープンしたら来てもらいたいという言葉が口から出たから。
- ② ヴァインセントからお願いされたカフェの設計がうまくできる自信がないのに、みんなに絶対に来てほしいと言ってしまったから。
- ③ カフェの設計を頼んだのはヴァインセントなので、ヴァインセントだけに見せるべきなのに、みなさんに来てほしいと言ってしまったから。
- ④ カフェの設計が所長に却下され、設計ができないことが決定したのに、ついうそをついてカフェがオープンすると言ってしまったから。
- ⑤ ヴァインセントからお願いされたカフェの設計がうまくできる自信はあるが、絶対に来てほしいと言うのは今のタイミングではないから。

(2) 傍線部①「仕事の関係者には言えないような思いも、ここでなら口にするのができた」とあるが、このときの智久について説明したものと最も適当なものを、次から一つ選び、その番号をマークしなさい。

- ① 料理教室の仲間たちは優しいので、事務所の仕事が忙しくなつてしまい自分の信念を貫けないうつらさを話せて気持ちが楽になっている。
- ② ここにいる料理教室の仲間たちは、仕事に対して同じような悩みを抱えているので、自分の気持ちを理解してくれると期待している。
- ③ 仕事をこなすことに精いっぱい、自分が何をしたいのかを見失っていたことに気づかせてくれた料理教室の仲間たちに感謝している。
- ④ 建築のことを全く知らない料理教室の仲間たちに自らの理想を語り、優越感に浸ることで所長に却下された悔しさを紛らわせている。
- ⑤ 料理教室の仲間たちなら仕事に対する自分の思いを受け止めてくれると思い、自分でも自覚していなかった素直な気持ちを口に出している。



(3) 傍線部㉗「自分がそんなことを考えていたとは、自覚していなかった」とあるが、智久が考えていたこととして最も適当なものを、次から一つ選び、その番号をマークしなさい。

8

- ① 実際のクライアントの要望に合わなくても、その物件を利用するひとたちが心地よく過ごせるような場所を作る仕事をしたいということ。
- ② 手がけた物件が完成し自分の手を離れたあとも、それを利用するひとたちの役に立ち、長く使いつづけてもらえる仕事をしたいということ。
- ③ 業界で高く評価されたり、賞をもらったりすることにこだわらず、長く使えて、歴史に残るような物件に携わる仕事をしたいということ。
- ④ 所長から認めてもらえる建物でありながらも、それを利用するひとにいろいろな影響を与えられるような仕事をしたいということ。
- ⑤ 前の作り手の思いを受け継ぎ、後の世にも残るように古い物件を作りかえて、みんなの人生を豊かにするような仕事をしたいということ。

(4) 傍線部㉘「やりようはいくらでもあるはずだ」とあるが、このときの智久の心情について説明したものとして最も適当なものを、次から一つ選び、その番号をマークしなさい。

9

- ① 所長にもう一度頼んでみてどうしても許可してくれなければ、黙ってやるなり、事務所を辞めるなりすればいいだけだと覚悟を決めている。
- ② 自分がやりたいことを誠心誠意説明すれば、所長も熱意を買ってくれるのではないかと思い、あきらめるのはまだ早いと張り切っている。
- ③ 一度断られた案件を蒸し返すと所長を怒らせるのではないかと不安になりながらも、やりたい気持ちを抑えきれず自分を奮い立たせている。
- ④ 一度は断られたが、話のもつていき方次第では所長を説得できるかもしれないと思い、ねばり強く交渉してみようとやる気になっている。
- ⑤ 仲間たちに気持ちを語ることで自分のやりたいことが明確になったので、今の自分ならば所長を説得できると自信に満ちあふれている。

3 次の文章を読んで、あとの(1)～(7)の問いに答えなさい。(4点×9問)  
(9点×1問)

紀貫之は、土佐守の任を終えて都に帰る旅の途中で、室津(現在の高知県)に立ち寄った。しかし、悪天候のため、次の目的地に出発することができず、何日もこの地にとどまっている。旧暦二月二十日の夜、貫之は月を眺めながら、奈良時代に中国へ遣唐使として渡った阿倍仲麻呂という人物にまつわる出来事を思い出す。

二十日の夜の<sup>⑦</sup>月出でにけり。山の端もなく、海の中よりぞ出で来る。かうやうなるを見てや、昔、阿倍仲麻呂といひける人は、唐土に渡りて、帰り来ける時に、船に乗るべき所にて、かの国人、馬のはなむけし、別れ惜しみて、かしこの漢詩作りなどしける。飽かずやありけむ、月出づるまでぞありける。その月は、海よりぞ出でける。これを見てぞ、仲麻呂の主、「わが国に、かかる歌をなむ、神代より神もよん給び、今は上中下の人も、かうやうに別れ惜しみ、喜びもあり、悲しみもある時には、よむ」とて、よめりける歌、

青海原ふりさけ見れば春日なる三笠の山に出でし月かも

④とぞ詠めりける。かの国人聞き知るまじく、思はえたれども、言の心を、男文字に様を書き出だして、ここの言葉伝へたる人に、いひ知らせければ、心をや聞きえたりけむ、いと思ひの外になむ賞でける。唐土とこの国とは、言異なるものなれど、月の影は同じことなるべければ、人の心も同じことにやあらむ。

(紀貫之『土佐日記』より)

(設問の都合上、一部改変)

(注) 唐土……中国

かの国人……中国の人

馬のはなむけ……送別の宴

かしこの……あちらの国(中国)の

飽かずやありけむ……なごり惜しかったのだろうか

かかる歌……このような歌

よん給び……お詠みになり

春日なる……奈良の春日にある

「春日」は阿倍仲麻呂の故郷にある

三笠の山……奈良県奈良市にある御蓋山

聞き知るまじく……聞いてもわからないだろう

言の心……歌の意味

男文字に様を書き出だして……漢字で歌の概要を書き出して

ここの言葉伝へたる人……日本の言葉を覚えている人に

心をや聞きえたりけむ……歌の意味を理解できたのであろうか

賞でける……ほめたたえた

この国……日本

言異なる……言葉が違う

月の影……月の光

(1) 傍線部㉗「月出でにけり」の「月」の様子を説明したものととして最も適当なものを、次から一つ選び、その番号をマークしなさい。 10

- ① 月が、山の端にかからずに、水中に沈んでいった。
- ② 月が、山の端がないので、海の上にただよっている。
- ③ 月が、山の端にかかりながら、水中から昇ってきた。
- ④ 月が、山の端がないので、海面に反射して映っている。
- ⑤ 月が、山の端にかからずに、水平線の向こうから昇ってきた。

(2) 傍線部㉘「上中下の人」の意味として最も適当なものを、次から一つ選び、その番号をマークしなさい。 11

- ① 自分と親しい人、顔見知り程度の人、疎遠な人
- ② 自分のすぐそばにいる人、近くにいる人、遠くにいる人
- ③ 身分が高い人、中程の人、低い人
- ④ 能力が高い人、中程の人、低い人
- ⑤ 身長が高い人、中程の人、低い人

(3) 和歌「青海原ふりさけ見れば……」にこめられた阿倍仲麻呂の心情を説明したものととして最も適当なものを、次から一つ選び、その番号をマークしなさい。

12

- ① 唐の国の人々との別れがつらく、少しでも長くこの地にとどまっていたいと名残を惜しむ心情。
- ② 別れはつらいが、生きていれば悲しいこともうれしいこともあるはずと、前途に希望を抱く心情。
- ③ 広い海原を眺めているうちに故郷の風景が頭に浮かび、遠い異国の地に親しみを覚える心情。
- ④ 水平線から月が昇ってくるのを見て、故郷の山で見た月を思い出し郷愁にかられる心情。
- ⑤ 異国の地で見える月よりも、故郷で見た月のほうがずっとすばらしいと、優越感に浸る心情。

(4) 傍線部㊦「とぞ詠めりける」について、阿倍仲麻呂がこの歌を詠んだ場所として最も適当なものを、次から一つ選び、その番号をマークしなさい。 13

- ① 山の端
- ② 唐土
- ③ わが国
- ④ 春日
- ⑤ 三笠の山

(5) 『土佐日記』の作者である紀貫之の詠んだ和歌として最も適当なものを、次から一つ選び、その番号をマークしなさい。 14

- ① 玉の緒よ絶えなば絶えねながらへば忍ぶることの弱りもぞする
- ② 春過ぎて夏来るらし白たへの衣干したり天の香具山
- ③ 秋来ぬと目にはさやかに見えねども風の音にぞおどろかれぬる
- ④ 思ひつつ寝ればや人の見えつらむ夢と知りせば覚めざらましを
- ⑤ 人はいさ心も知らずふるさとは花ぞ昔の香ににほひける

(6) 本文中の内容と合致するものとして最も適当なものを、次から一つ選び、その番号をマークしなさい。 15

- ① 唐の国と日本は、かつては同じ言葉を使っていたが、感情をより細かく表現するために、それぞれの国の言葉で歌を詠むようになった。
- ② 唐の国と日本では、言葉が違っただけでなく文化やものの感じ方も異なるため、仲麻呂は一日でも早く故郷に帰りたい一心で歌を詠んだ。
- ③ 唐の国の人にも日本にも、月の光は等しく降り注ぐものであり、たとえ言葉が違っても、月を見てもの思う心に共感を寄せることはできる。
- ④ 唐の国と日本では、使われている言葉が違いため、どんな土地にも等しく光を届ける月を歌に詠んだところで、悲しみは癒やされない。
- ⑤ 仲麻呂は唐の国の人に、楽しいことや悲しいことがあつたときには歌を詠むものだと教わつたため、送別会の席で歌を詠んで贈った。

- (7) この本文をもとにして各グループで調べたことを持ち寄り、意見交流を行った次のやりとりを読み、後の(a)～(d)の問いに答えよ。

Aさん 私たちのグループでは、「漢詩作り」について調べました。それによると、唐の著名な詩人である李白や王維らは、遣唐使の任を終えて日本へ帰国しようとした仲麻呂を思う詩を作ったそうです。李白が作った詩を、次に紹介します。

哭 <small>く</small> ス <small>ちよう</small> 晁 <small>けい</small> 卿 <small>こう</small> 衡 <small>らう</small>	李白	
日 本 晁 卿 辞 帝 都		日本の晁卿衡（仲麻呂の中国名）は、唐の都長安を辞去し、
征 帆 一 片 遶 蓬 壺		一片の去りゆく帆かげは、蓬萊山をめぐる。
明 月 不 帰 沈 碧 海		明月のごとき君は、碧色の大海原に沈み、
白 雲 愁 色 滿 蒼 梧		白雲と深い哀しみの色が蒼梧の空に満ちわたる。

「哭す」とは、「大声をあげて嘆き悲しむ」という意味です。日本に向けて出航した船が途中で暴風雨に遭ったため、李白は仲麻呂が死んでしまったと思い込んで、この詩を作ったのだそうです。

Bさん 僕たちのグループでは、この文章で重要な役割を果たしている「月」をテーマにした作品を調べてみました。李白や王維と同じ時代に活躍した杜甫という詩人は、「月夜」という詩の中で、遠く離れた土地にいる家族への思いや愛情を月の光に託しています。

Cさん 杜甫といえば、「国破れて山河在り 城春にして草木深し」という書き出しから始まる「」という詩がありますね。

Dさん 松尾芭蕉の『おくのほそ道』で学習したことを思い出しました。芭蕉が平泉の高館で思い起こした漢詩でしたね。芭蕉はそこで、「夏草や兵どもが夢の跡」という俳句を詠みました。「」と比べてみると、どちらもところに共通点がありそうです。

Aさん こうして関連作品を調べてみて、日本文学と中国文学には密接な関わりがあるということがわかり、勉強になりました。

(a) Aさんが紹介した漢詩の詩型として最も適当なものを、次から一つ選び、その番号をマークしなさい。

- ① 五言絶句
- ② 五言律詩
- ③ 七言絶句
- ④ 七言律詩
- ⑤ 四言古詩

(b) に入る詩題として最も適当なものを、次から一つ選び、その番号をマークしなさい。

- ① 静夜思
- ② 江南春
- ③ 絶句
- ④ 春望
- ⑤ 春晓

(c) に入る文章として最も適当なものを、次から一つ選び、その番号をマークしなさい。

- ① 人間や自然のすばらしさを、韻文の形式で表現している
- ② 戦争や災害に対する批判や憤りを、散文の形式で表現している
- ③ はかない人間の営みに対する感慨を、韻文の形式で表現している
- ④ 目の前の雄大な景色に対する感動を、韻文の形式で表現している
- ⑤ 身近な人間や自然に対する敬愛を、散文の形式で表現している

(d) Bさんのグループがテーマにした「月」について、次の条件に従って文章を書きなさい。

条件1 二段落構成で書くこと。

条件2 一段落目には、あなたが「月」のどのようなところにどんなイメージ、または感想を持つか、書くこと。

条件3 二段落目には、なぜあなたがそのようなイメージや感想を持つのか、その理由を書くこと。

条件4 原稿用紙の正しい使い方に従って五行以上、七行以内で書くこと。

4 次の(1)～(3)の傍線部の読み方に対する適切な漢字をそれぞれ①～⑤から一つずつ選び、その番号をマークしなさい。(2点×3問)

- (1) 危険な箇所があるので注意をカシキする。
- ① 換気    ② 勘気    ③ 官記    ④ 喚起    ⑤ 歓喜
- (2) 空室があるか宿泊先にシヨウカイする。
- ① 紹介    ② 照会    ③ 商会    ④ 正会    ⑤ 詳解
- (3) 新しい社員をとる。
- ① 取る    ② 執る    ③ 撮る    ④ 採る    ⑤ 捕る

5 次の(1)、(2)の熟語は下の( )内に分類されるが、同じ分類の熟語をそれぞれ①～⑤から一つずつ選び、その番号をマークしなさい。(2点×2問)

(1) 手当 (和語)

- ① 時間      ② 着物      ③ 年齢      ④ 賃金      ⑤ 正確

(2) 還元 (漢語)

- ① 坂道      ② 問柄      ③ 青筋      ④ 子供      ⑤ 年齢



